

親子五人無事たどりついたのは四月二日だった。日頃父母と妹の三人住いのところに黒崎から強制疎開の兄達家族五人が一年前から同居、それに八月の空襲で焼け出された姉が親子三人で帰り、それに今度私達五人が引揚げた来たので一挙に十六人。

五月私の勤務が八幡の花尾国民学校ときまり、幸い姉の持家の借家があいてそこに私達は移り住んだ。六畳と二畳の二間の古家だが家賃いらず、大助かりである。ヤミ米一升百二十四の時代、学校の給料は私の前歴考慮で破格だという九十八円、もちろん生計は成り立たない。台湾から持って帰った五千円はたちまちの中になくなってしまった。私の通勤用の服などは引揚者に支給された軍服や軍靴で間に合ったが、食べ盛りの子供達をかかえて四苦八苦のさまは誰もが経験したことで変りはないだろう。今でも思い出されるのは日曜日や休みの折に、にわか作業員として日雇い道路仕事をしたこと、夏休みには無理に頼んで製鉄所構内の石炭仲仕の作業、馴れない作業とはいえ、女の人にも及ばない作業量、四十五円の日給が有難いやらなさないやら、無理がたたってマラ

リヤ発熱に悩まされたこともしばしばであった。石けんも手に入らない状況から子供達の下着にシラミがわき、熱湯でシラミ退治をしたこと、たまに手に入ったさつまいもを貴重品のように親子して分けて食べたこと、今から考えれば夢のような話の連続だった。それもこれも敗戦国の国民の当然忍ばねばならなかった神の試練だったかも知れない。

涙は消えず、台南よ

宮城県 小島 平一郎

私は台湾鉄道の機関士として、戦時中は、軍需品、出征軍人臨時列車等の輸送に活躍してきたが、昭和十八年第二回目の召集を受け、台南第四部隊に入隊した。昭和十八年十二月二十五日、いよいよ南方第一線に出征することになる。

私は南方の最前線、海第八九四三部隊が警備するチモール島に派遣された。チモール島とは、ニューギニア

とオーストラリアにはさまれた、台湾より小さな島で、兵力二万人ほどの最前線だ。九死に一生を得て、敗戦後は直接日本に復員することになる。

母親は昭和十六年に病死し、以後は父が幼い弟妹たちと銃後の護りを頑張っていた。私は長男で、母亡き後は父は私に期待していたようだ。

私が南方戦線に出征した直後の十二月二十六日に、餅をついて息子に食べさせようと、弟妹たちを伴って面会に隊を訪れたが、前日南方の前線に出征したことを聞いて、「あの若さでとうとう殺されてしまうのか」と、弟妹たちと共に男泣きに泣いたという。

状況が悪化した昭和二十年三月二十九日、B 29 による爆撃で、(父は定年前に、長年つとめていた台湾鉄道を退職し、台南市郊外の台湾製糖の技術者として活躍中) 父は二百五十キロの直撃を受け、無残な最期を遂げた。

残された子どもたちは十八歳(妹)を頭に十六歳(弟)十三歳(弟)十歳(妹)の四人。空襲で家は焼かれた。子どもたちは肩を抱えて泣きあかした。

嘉義に嫁いだ姉をたよりに阿里山に疎開した。終戦に

より嘉義の家におったが、負けた国の無力さで、暴徒が真昼間押し入って、家財道具を略奪し、牛車で運んでいく。金目の物と現金は肌身につけて略奪から免れたが、警察官とか、官職の上役にあった者は、ところどころで拉致され、ひどい仕打ちを受けたという。しかし、満州や支那大陸のような、わが子を殺傷したり、残留孤児とするようなことはなかったのが、島国台湾の幸運であつたかも知れない。

弟妹たちは、引揚げるまでには、めばしい物はほとんど持っていかれ、暑い常夏の台湾で何枚も重ね着をして、良い着物を取られないようにした。

弟妹四人で、父母兄弟の遺骨をそれぞれ一つずつ抱えて故郷に引揚げたが、伯父叔母といつても、初対面の情けのうすさは他人の如しで、伯父叔母とは名ばかり水のみ百姓の実家では、十分な収穫もなく、お世話どころか、二月の厳寒に初めて見た雪に着の身着のまま、寒い夜を体を寄せあって過ごしたという。

私がおびに復員するということは弟妹たちは思っていなかったようだが、予想以上に早い復員で弟妹一同歓喜

して泣き、私の五体にしがみついて離れなかった。

亡母の従兄弟の世話で縁あって塩釜に定着し、体を休めるいとまもなく、進駐軍労務者、水産加工屋の工夫、安定所の工夫等、なりふりかまわず食のために働いた。

弟妹たちは年齢的に中途半端で、稼ぎにもならず、淋しい夜など、こんなときに父が健在でいてくれたらなあとつくづく思った。

在台二十五年、営々として築いた地位も、名誉も財産も、何一つ残ることなく、戦争の犠牲となって消え失せた。

二人の子に支えられ

愛知県 熊井光子

昭和十七年七月、夫は嘉義より生後半年と三歳の子を置いて台南の部隊に出征しました。台湾生まれの私たち夫婦は、なんの苦勞も知らず暮らしていました。ある日警察から呼び出されました。行ってみると、京城の部隊

にいる軍医の兄の所へ出した封書を出し、「貴女が出した手紙ですね。」と言われ、始末書を書かされました。部隊に出した手紙まで開封されるとは、ただただびっくりしました。手紙の内容は、夫が戦地に出発するらしい、と高雄に住む夫の両親から、知らせがあり、私は二人の子を連れて行き、そのときにあった空襲のおそろしさを書いた手紙でした。夫は検察庁に勤務の身でしたので、なんともいやな思いをしました。嘉義駅からの軍用列車にB29から爆弾が落とされ、市内は次から次へと爆発する爆音で恐怖におののいてしまいました。子どもの手を引いて、裏庭に掘った小さな防空壕にもぐりこみました。市内を煙でおおうため、一軒から煙を二か所出すよう通達がきました。苦勞して青葉のついた枝を取り、煙を出しました。不安な毎日のなか、敗戦の知らせがありました。台湾人の子どもが、私の家の中に砂を投げこみ笑って出て行くこともありました。

二十一年三月、三千円持ち近くの公学校に集結するよう、通達がきましたので、あわてて作った手製のリュックを二人の子どもにもしよわせ、家財も何もかも残して